

Spoken Communication, Written Communication の相違の観点から

—An example of discourse analysis

八木克正（関西学院大学）

日本語を話す場合と、日本語を書く場合は全く違った表現法をとっていることは言うまでもない。英語についても全く事情は同じである。日本語では直観的にその違いが分かるものだが、日本語を母語とする者にとって英語では事情が異なる。英語の書き言葉と話し言葉の表現法がどのような違いがあるのかを考えるのがこの発表の目的である。この問題は、語彙の使用域(register)、文構造、談話構造などの面から考えることができるが、ここでは、主に談話構造の観点から考えてみたいと思う。

そもそも人の言語は話し言葉から始まった。その後、人類史の中で見ると、ごく最近になって文字をもつようになり、出来事を記録して後世に伝えることが容易になった。と同時に、話し言葉につきものの繰り返しや言いよどみなどの伝達には直接不要な部分を省いたり、非論理的なものを論理的にするといったことによって、書き言葉が洗練されることになる。人類が長い歴史の中でほとんどの期間使ってきた話し言葉が自然言語であるとする、書き言葉は、上記のような意味で、必ずしも自然言語そのものではない部分がある。

日本の英語教育は、書き言葉教育から始まった。それが近年になり話し言葉教育へシフトされつつある。いわば、人類が言葉を読むようになり、その後で書き言葉を創り出したのは逆のプロセスをたどっている。実は、近代における科学的な言語研究も日本の英語教育と同じプロセスをたどっている。近代の科学的な言語研究はヨーロッパ諸言語の系統を研究する「比較言語学」(comparative linguistics)に始まる。これは記録された言語の研究、すなわち書き言葉の研究である。それが英語などの個別の言語研究にも応用され、Jespersen, Poutsma, Kruisinga などの歴史的な立場からの文法書や、*The Oxford English Dictionary (OED)*のような辞書が作られた。

これが、ソシュール(Ferdinand de Saussure)に始まる構造主義の台頭にもとない、言語の構造を研究する方法が開発され、ひとつの結果として、アメリカ構造言語学が生まれた。歴史主義との決別を意識してか、話し言葉の研究が中心であった。そして、言語の研究は、音声、音韻、形態素、統語、意味といった、小さな単位から大きな単位へと下から積み上げる研究プログラムをもっていた。その後、Chomsky による「生成文法」が誕生し、人のもつ言語直観を重視し、言語資料をネイティブスピーカの内省から得る方法をとった。生の話し言葉は不完全なものであり、研究対象にはならないとし、結果として、書き言葉を研究するのと同じことになったと考えてよい。そして、生成文法は「言語は文の集合である」という定義に現れているように、文の構造を言語研究の中心に据える。そして、文法研究は、書き言葉の文の構造を研究することとなり、その影響は今でも続いている。文の構造を知ることが第一であるから、統語論が中心であり、そこから音韻論と意味論へと展開するというプログラムである。

しかし、文の構造がいくら分かっていても、文が文脈の中で、また、談話の中で、社会の中でどのような働きをしているのかということがわからなければ、言語を習得したことになるということも明らかである。本発表は、本来、実際に使われた談話を分析することから文法研究

がはじまるべきであるというのが中心的な論点である。また、このような観点からの研究が、英語コミュニケーション能力を高めるために何をしなければならないかの道筋を示す可能性があると考えられる。

ここで考える文法研究のモデルは、アメリカ構造言語学がとった方向とは逆の、「上から下へ」(from-top-to-down model)と言えるものである。これは、また、学校の授業での英文解釈のモデルでもある。あるまとまった文章をテキスト(text)ということにしよう。そのテキストを理解するためには、そのテキストに書かれていることに関する知識や背景知識がたくさんあればあるほど、内容理解の助けになる。アメリカの記事より日本の記事が理解しやすいのがその典型である。そのテキストの構造を分析するための方法論を提示するのが、「談話分析」(discourse analysis)である。文に構造があるように、テキストにも当然、構造がある。ある新聞記事が40の文からなっていると、その文をばらばらに並べ替えるとまったく意味をなさないとということから考えても、テキストが構造をもつことは明らかである。

言語の分析を談話の構造を明らかにすることから始める方法は、教室での英文解釈のためにも応用できる。教室で、教師がテキストを示して、第一文からいきなり意味解釈をするようなことでは、学生・生徒にとって、はなはだ面白くない、わかりにくい授業になるだろう。このテキストは、どのような構成になっているか、全体として何を述べようとしているか、についての解説があれば、少々難解な文章でもとっつきやすくなる。次の段階でパラグラフの構造を把握し、さらに文の構造をみて、文を構成する成句表現(phraseological units)や語、音韻、音声といった解釈に進むということがこの from top-to-down model である。

文法研究をこのようなモデルをもとに行おうとすると、現状では、「テキストの構造研究」と「成句表現の研究」が、もっとも遅れている部分である。教室で英文解釈をする場合、学生がつかずくのは、文の構造がつかめないという場合もある(これは統語論の問題である)が、それよりも、成句であることに気付かないことが原因であることは珍しくない。in spite of など、受験勉強で叩き込まれるものは良いとして、with regard to, with respect to などという、場合によっては、regard や respect は調べるが、成句としての意味把握ができないことがあるというのがその例である。成句表現というのは、いわゆるイディオムだけではない、談話の中で繰り返し生じる表現方法で、これを習得することが言語習得、言語学習の中心であることは近年盛んに言われているところである。

この発表では、書き言葉の談話構造の特徴を調べるために、2003年8月14日～15日に起こったアメリカとカナダにまたがる大停電事件を報じる *Time* 誌の記事と、話し言葉としてCNNの“Newsnight”での報道を比較した。その結果、談話に結束性(まとまりのある話や文章にするための手段)を与えるために、「談話構造」に関しては、話し言葉では、代名詞などによる置き換え(substitution)が中心であるのに対して、書き言葉では、代名詞などによる置き換えのほか、省略(deletion)や語彙の言い換え(lexical)が盛んに行われていることがわかった。また、「情報構造」の面では、話し言葉では直線的(linear)であり、あらかじめ文の構造を考えてから話し始めるというよりは、文を話し始めてから、あとでその続きの部分を修正するという特徴がみられる。対して、書き言葉では、あらかじめ文の構造を考えてから書くために、簡潔で内容豊かな構造にすることができる。「統語・語彙」の面からは、話し言葉は、話の流れ・思考の流れにそって、文法構造に依存する面が強く、これに対して書き言葉は、簡潔な中に情報を大量に盛り込むために、名詞表現や、名詞に命題の内容を盛り込むといった、語彙に依存する面が強いことがわかった。

以上、話し言葉と書き言葉の談話構造の比較のひとつの手段として、同じニュースについての、*Time* 誌の記事の書き方と、CNN 放送の報道の表現方法を比較しその概略を示した。発表の中では、*Time* 誌の記事を情報提示の流れの観点からとらえると、必ずしも読みやすい記事にはなっていないということも述べた。書き言葉の中で narrative と呼ばれるジャンルの新聞記事などを、このような手段で分析することによって、どのような順序で情報を提示するのが好ましい書き方なのか、すなわち、あるべきテキストの構造について一般論を引き出すことができるという見通しを示した。